



5月26日(金)、6年生の授業参観で人権学習の授業が行われました。NHK教育テレビで2010年1月に放映された「なまえをかいた～吉田一子・84歳～」というドキュメンタリー番組を視聴し、映像に出てくる吉田一子さんの生き方を通して、識字(しきじ)について考えました。先日担任の先生が、学習を終えた子どもたちの感想を見せてくれたので、今回は少し「学校たより」を通して、子どもたちの感じたことを、お伝えしたいと思います。

映像の中では、84歳になる吉田一子さんが一生涯懸命ひらがなや漢字を練習している姿が映し出されています。子どもたちは映像を見て、吉田さんの日常生活での苦勞したことややすかったこと、文字を獲得していく中でうれしかったこと、等をプリントに書き留めていました。映像の中で、5年生の学年集会のシーンがあり、吉田さんが『母』という字を子どもたちの前で初めてホワイトボードに書くシーンがありました。吉田さんが一所懸命書いている姿に思いをさせ、真剣に食い入るように映像を見ている本校6年生の子どもたちの姿がありました。

現在、社会生活では、SNS等で、個人が誹謗中傷されるような出来事が起こっています。授業での映像を見て、子どもたちが少しでも何かを感じ、文字や言葉の持つ大切な意味について、考えてくれればと思います。

6年生が書いてくれた感想の中から、今回は少し紙面を借り、抜粋して紹介したいと思います。

- 学校で字を習わなかった一子さんにとって、字はとても大事でかわいい存在だけど、私はそんなことなんて思ったことがありませんでした。この学習で、字は、とても大切だということがわかりました。
- 授業を終えて、字は大切なんだなあと思いました。学校に行けるのは当然のことではないんだと思いました。これからは、字をきれいに書いていこうと思いました。
- 改めて日々使っている字は大切だと思いました。一子さんの日常は、文字を書けない、読めないだけでこんなにも大変になるんだなあと思いました。
- 一子さんが少しずつ字を書く練習をしているのがすごいと思いました。その理由は、私にとっては、字を書くことは、あたり前だと思って書いていたからです。
- 一番心に残った場面は、一子さんが初めて電車に乗った時です。ラーメンを食べられなかったときに、漢字が読めたりするのはあたり前だと思っていたけど、漢字が読めるのはありがたいことなんだと思いました。
- 私は、一子さんが家に帰ってからも字を練習して、努力していたところが一番心に残りました。私も一子さんみたいに努力できる人になりたいと思いました。
- 私は学校が面倒くさくていやだなあと思っていたけど、一子さんが学校に通えていなかったから、こんなにも苦勞しているなんて知らなかったです。これからは文字1つ1つを大事にしようと思いました。
- 一子さんは、銀行でお金がおろせなかったのが悔しくて、字を習い始め、2年ぐらいかかって、銀行からお金をおろせるようになりました。あきらめないっていうのがすごいなと思いました。
- 公文、塾を習わせてもらっていることはすごくありがたいこと。こうやって字を書いていることは普通じゃないってこと。私は、公文行きたくない、塾行きたくない、公文の宿題めんどくさい、って今まで思っていました。でも、一子さんにとってはうらやましいことだと思います。字を書きたいのに書けない、読めない人がいることを知って、私は一子さんにとって、とってもとっても失礼なことを言っていたと感じました。そう思うと、そんなことを言っていた自分が情けなくなってきました。字をこんなにも愛し、かわいいと思っている一子さんを思うと、1限1限の授業を大切にしないといけないうるなあと思いました。



この学習を通して、子どもたちが感じたのは、「字の大切さ」「学ぶことの大切さ」でした。吉田一子さんが、一生涯懸命学んだ字を手の中に握りしめて持って帰るところや、駅前の掲示板に「かわいい」字で人を傷つける言葉が書いてあるのを見て、腹立たしく思ったところから、「普段何気なく書いている字が、実はとても大切なものだということがわかった」と感想に書いている子がたくさんいました。

SNSなどの情報伝達手段の発展により、文字や言葉が、人を傷つけたり、人と人とのつながりを切ったりしていることがメディアの報道から伝わってきます。子どもたちには、学習を通して「文字や言葉は人と人との関係をつなぐものである」といった、文字や言葉の持つ本来の原点に気づいてほしいと思います。(文責 北住 昌文)